

第三十六回

旧藏内邸と煎茶 せんちや

室です。

旧藏内邸では入場料と別に三百円で煎茶と郷土のお菓子を提供しています。とても評判よく皆様から喜ばれています。どうして旧藏内邸では煎茶なのかといいますと、藏内家は煎茶を好みとし、煎茶文化の美的意匠や様式が建物や庭園に色濃く表れているからです。

煎茶は抹茶に比べ歴史は浅く、江戸時代初期に黄檗宗（本山は京都府宇治市萬福寺）開祖の隠元が始め、

のち文人や画家の間で広まり、明治大正時代に流行しました。一方抹茶は鎌倉時代、栄西禅師が中国から伝え、後に日本独自の茶の湯、茶道として広がります。

抹茶席が閉鎖的な小空間に「わび・さび」の独自の精神文化を創造するのに対し、煎茶席は室内からの庭や眺望を重視した明るく開放的空間に風雅を楽しみます。

さて住宅と庭園を建設した藏内保房は古美術に造詣が深く、特に煎茶文化の代表者でもある江戸時代の文人画家、田能村竹田の書画収集家として有名でした。また庭園の園池にやや張り出した八畳間の茶室からは大きな池と正面背後に滝石組が山水画のように見える、まさに煎茶文化の山水への愛好が表れた開放的な茶

写真の浴室隣の湯上りの間（脱衣所）は城井谷の山並みを借景に、枯流れの石組と降り蹲踞（おりつくばい）を設え、ソテツが植えられ、夏の湯上がり涼みながら煎茶をいただき、庭を鑑賞する風情のある茶室です。また裏庭には泉石組を設え、

荒々しい自然石を配し、針葉樹の巨木が立つ、山中を意識した涼感ある庭です。

この夏、旧藏内邸で煎茶をいただきながら、風鈴と水の流れの音に涼んでみませんか。

（文化財保護係 高尾栄市）



緑

のふるさと協力隊 No.4

藤田 伸平

夏の暑さもいよいよ本番を迎える季節になりました。皆さんいかがお過ごしでしょうか。

さて、6月末から7月中旬にかけての活動では、築城地区及び椎田地区の通学合宿、八津田小学校の田植え授業、海開き、キャンプ場開き、マリンスポーツ体験教室と様々な行事のお手伝いをしました。同時に、

鶏糞まき、田植え、水田の除草作業、スイートコーン収穫・出荷、里芋の植えつけ、山での間伐作業など農業での貴重な体験をすることができました。

キャンプ場開きでは、寒田地区で取れた素材を使い石釜で焼きあげたピザの販売を手伝いました。評判は上々で沢山のお客さんで賑わいました。海開きでは、大勢の人たちと朝清掃を行い、以前お世話になった方々と再会して話が弾みました。関東平野が延々と続く茨城県で育った私にとって、海と山の距離が近い築上町の地理はおもしろく感じられ

ます。地平線いっぱい青色が広がり開放的な景観の浜宮、風に涼みながら清流と鳥のさえずりを楽しめるキャンプ場。同じ町内でもまったく違う顔をもっていますね。海と山どちらも楽しめる築上町が賢沢でうらやましく感じました。

各地での田植えもよい経験になりました。今まで水田に入ったことがなかったので、最初のころは動くことさえも四苦八苦しました。そんな私を尻目にあつという間に苗を植えつけていく田植え機。機械化の凄さと便利さを実感しました。一方で

手植え体験では、様々な参加者の人たちと作業し持ち寄ったお弁当をいただきました。お年寄りが語る、かつての人々が寄り合って集落行事として大切にされてきた田植えの雰囲気を感じる事ができました。また、アメンボ、トンボ、カエル、ヘビなど様々な生物たちと出会い、水田が生物の命を守っていることも知りました。田んぼは、い

るようなことを学び考えさせられる場所です。特に印象深いのはジャンボタニシに関する話です。もともとは外国から持ち込まれて野生化し大繁殖して水稻の苗を食い尽し害虫と言われるジャンボタニシですが、水位の調整などが上手くできれば雑草のみを食べ、除草剤なしでの栽培ができるそうです。人間の都合によって害虫とも益虫とも呼ばれるジャンボタニシ。人間と自然や生物が上手にバランスを取りながら付き合っていくことがいかに難しいことかと考えさせられました。

日々の活動・生活の中で自分の無知や不勉強さを痛感させられます。皆さんにお尋ねする場面が沢山あると思います。今後ともご指導お願いします！



▲キャンプ場開きにて